

## 『 主への告白と讃美 』

——教会修養会が開催された主日の説教——

小河信一 牧師

フィリピの信徒への手紙 2章9節～11節

<sup>9</sup> このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。<sup>10</sup> こうして、天上のもの、地上のもの、地下のものがすべて、イエスの御名にひざまずき、<sup>11</sup> すべての舌が、「イエス・キリストは主である」と公に宣べて、父である神をたたえるのです。

先週に引き続き、本日、キリスト賛歌の後半(茅ヶ崎香川教会の今年度の主題聖句)を神の言葉として取り上げます。

フィリピの信徒への手紙 2:6-11 のキリスト賛歌は、パウロが書いたものではなく、当時、流布していた教会の讃美歌から採用したものだと言われています。

パウロは、コリントの信徒への手紙 — 13 章で「愛の賛歌」をつづっているように、詩的な靈性に満ちた人でした。その彼が他の交わりのある教会から、このキリスト賛歌を、すなわち、〈信仰告白〉を受け取り、今それを、フィリピの教会に伝達しています。

そこに、主にあってへりくだる伝道者パウロの姿勢が垣間見られます。他からの〈信仰告白〉を受け止めることを通して、直前のフィリピの信徒への手紙 2:3 の勧め「互いに相手を自分よりも優れた者と考える」を自ら実践していると言えます。

そしてまた、パウロが人のつくったキリスト賛歌を採用したことは、いったい〈信仰告白〉とは何か、つまり、信仰を告白する点で何が大切なのか、を私たちに知らせています。

コリントの信徒への手紙 — 15:3 前半——

最も大切なこととしてわたしがあなたがたに伝えたのは、わたしも受けたものです。

このパウロの言葉は、最も古い形の〈信仰告白〉(Ⅰコリント 15:3 後半—5)に対する前置きとして述べられたものです。

ここには、信仰は決して個人的なものではなく、教会を通して、伝えられ、受け取られるものであることが明示されています。そして、もともと、どこから信仰が与えられたのかをさかのぼれば、「主から受けた」(Ⅰコリント11:23)ということになります。主イエス・キリストが、私たちの信仰の主であります。

今、パウロのコリントの信徒への手紙 一 の言葉を引いて、元来、信仰とは受けるものであるということを目指しました。実は、パウロが受け取ったキリスト賛美の字句の中には、旧約聖書から受け取った部分、すなわち、引用句があります。

イザヤ書 45:23-24——

23 わたしは自分にかけて誓う。

わたしの口から恵みの言葉が出されたならば

その言葉は決して取り消されない。

わたしの前に、すべての<sup>ひざ</sup>膝はかがみ

すべての舌は誓いを立て

24 恵みの御業と力は主にある、とわたしに言う。

主に対して怒りを燃やした者はことごとく

主に服し、恥を受ける。

キリスト賛歌の一部分の元になった言葉をたどると、この賛歌のすばらしさを見直すことができます。

上のイザヤ書の下線部と、フィリピの信徒への手紙 2:10-11「すべて……ひざまずき(膝をかかめ)、すべての舌が、イエス・キリストは主であると公に宣べて(言って)」を重ね合わせると、キリスト賛歌が旧約の詩から、生き生きとした信仰を受け継いでいることが分かるでしょう。

一種の擬人法的な描写のようですが、イザヤ書 45:23 では、「すべての膝」と「すべての舌」とが躍動しています。人間が主体的に動いているというよりも、あたかも、神の霊が人に降って(サムエル記上 10:5-6)、「膝」と「舌」とが連動して神を拝んでいるかのようです。

イザヤ書 45:23-24 の中に喜びという表現は無くとも、礼拝する者の歓喜が伝わってきます。これが、単なる熱狂でないことは、その中心に、神の御前での誓い及び宣言(「誓いを立て……言う」)が据えられているから分かります。

このように、フィリピの信徒への手紙のキリスト賛歌には、旧約の賛歌から、礼拝する者の喜びと力が注ぎ込んでいます。

しかしながら、〈信仰告白〉として、イザヤ書 45 章の賛歌を読むならば、背景に隠されているものがあります。「恵みの御業と力は主にある」または「すべての膝」・「すべての舌」というように、主なる神と人間は前景に出ています。その主なる神と人間とは御言葉によって(イザヤ書 45:23 前半)、親密な交わりが築かれています。人間には、神を礼拝する姿勢が整っています。それでも、まことの〈信仰告白〉としては、画竜点睛を欠いているのではないのでしょうか……。

イザヤ書 45:23-24 が〈信仰告白〉として弱い、不十分であるというよりも、古い〈信仰告白〉が改革されて、フィリピの信徒への手紙 2:6-11 において新しい〈信仰告白〉となった、と捉えるべきではないか、と私は思います。

フィリピの信徒への手紙 2:6-11 の〈信仰告白〉を言い表したある教会またはある信仰者とパウロは、どの点にこの〈信仰告白〉の新しさがあるのかを知っていました。この新しさこそキリスト賛歌の真価であり、パウロはそれを受け継ぎたいと考えたのでしよう。

フィリピの信徒への手紙2:6-8 キリスト賛歌の前半――

<sup>6</sup> キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、<sup>7</sup> かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、<sup>8</sup> へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。

キリスト賛歌がはじめに打ち出していることから分かるとおり、私たちの目の前の〈信仰告白〉が宿しているみずみずしい力、その根源こそ、主イエス・キリストでした。ある教会またはある信仰者が、「十字架の死に至るまでの従順」という角度から、主イエス・キリストの御業に光を当てたのです。鋭く、少し独得の角度から、主イエス・キリストの十字架に、すなわち、私たちへの福音である、罪からの救済に焦点が合わされています。

主イエス・キリストの御業と御言葉という啓示があればこそ、私たちは、正しくまた喜びをもって神を拝むことができます。そのことをよく認識しているパウロは、コリントの信徒への手紙 二 13:13 にある祝祷も、〈父・御子・御霊〉の三位一体の神の中で、「主イエス・キリストの恵み」を最初に置いています。

フィリピの信徒への手紙2:9――

このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。

フィリピの信徒への手紙 2:6-8 のキリストに続いて、ここに、父なる神の働きが言い表されます。

へりくだられたキリストへの報酬、つまり、ほうびとして、父なる神はキリストを天に引き上げられたのだ、というのは、行為義認にも通じる誤った理解です。

そうではなく、キリストは十字架に高く上げられたが、それと共に、父なる神はキリストを天に高く上げられた、と受け止めるべきでしょう(参照:ヨハネ福音書 3:14、8:28、12:32)。言い換えれば、キリストの十字架と、キリストの高挙……<sup>ひ</sup>延いては復活を含め……とは、一貫した神の救いの出来事であったのです。それは、

永遠のむかしに計画され、ふさわしい時と場所において成し遂げられた父なる神と御子、イエス・キリストによる決定的な出来事でした。

すでにその最重要な出来事が全うされていることに対し、天よりアーメン(然り)が唱えられている、それがフィリピの信徒への手紙 2:9 の一句の持つ意味です。

フィリピの信徒への手紙2:10-11——

<sup>10</sup> こうして、天上のもの、地上のもの、地下のものがすべて、イエスの御名にひざまずき、<sup>11</sup> すべての舌が、「イエス・キリストは主である」と公に宣べて、父である神をたたえるのです。

十戒や主の祈りが、前半、神の御業から後半、人の応答へと転じていくように、フィリピの信徒への手紙 2:10-11では、被造物すべてを挙げての応答が描かれています。「ひざまずき、公に宣べて、たたえる」、それはまさに礼拝そのものです。パウロが福音的な生活原則として提示した「一つの霊によってしっかり立ち心を合わせて(=一つの心をもって)」は、はじめに礼拝を置いてこそ実践されるものです。

神の大いなる数々の御業は、私たちにとって計り知れませんが、「イエスの御名」に拠れば、間違いありません。真心から「イエス・キリスト」、「イエスがメシア、救い主」と告白すれば、十分です。信仰をもって御名を呼ぶ(マタイ6:9)、その時すでに、私たちの祈りは、神に聞き届けられています(詩編145:19、マルコ11:24)。

「告白する」とは、「同じことを言う」という意味です。その点、信仰者の祈り、「私の祈り」、「あなたの祈り」、「彼・彼女の祈り」の内容は多様でしょうが、ただひらすら「イエスの御名」に拠っているという一点において同じです。あらゆる機会に、「私の災い(から逃れること)」であれ、「あなたの幸い」であれ、祈りを御名によりて合わせるすることができます。

先ほど、「真心から……告白すれば」と言いましたが、信仰者にとっての「真心」とは、何でしょうか？  
それが「純粋な心」であれば、多くの人が「告白」から身を引かなくてはならないでしょう。

詩編 51:19——

しかし、神の求めるいけにえは打ち砕かれた霊。

打ち砕かれ悔いる心を

神よ、あなたは侮られません。

「打ち砕かれ悔いる心」——これを、人が自分で作り出したり保持しようとするならば、改めて、キリスト賛歌のはじめに戻らなければなりません。「イエス・キリストは主である」という〈信仰告白〉は、私は「主」ではない、また、私は「主」の前にひざまずく者であるということを教えているのではありませんか。

まず、キリストがこの私を、敵であった私を愛して下さったことを信じることです。そして、礼拝の中で、主イエス・キリストの十字架と復活によって、私たちが救われたことを告げる聖餐と説教にあずかることです。

キリストの御力と赦しによって「清められた心」が整えられたとき、すべての罪に対する悔い改めをもって「告白する」ことができるのです。

〈主イエス・キリスト → 神 → 聖霊に導かれた会衆〉というキリスト賛歌の有する正確な歯車が、原動力となって、茅ヶ崎香川教会が神の国をめざして前進していくように、そして、私たち自身の生活が、正しい告白、深い感謝(フィリピ 1:3)、高らかな讃美(同上 1:11)をもって喜びに満たされるように祈り求めましょう。